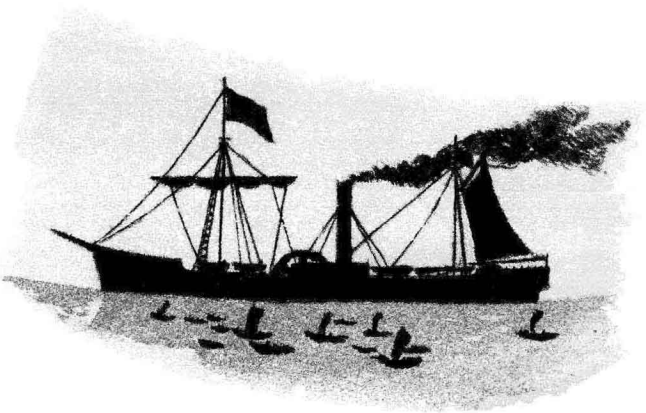
海の祭礼

吉村昭

海の祭礼

吉村昭

文藝春秋



海の祭礼（うみのさいれい）

昭和六十一年十月二十五日　第一刷
昭和六十二年一月十五日　第三刷

定価　一三〇〇円

著者　吉村昭

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

© Akira Yoshimura 1986　Printed in Japan

ISBN4-16-309240-4

海の祭礼

装帧　聚屋　充

题签　岡村天溪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

蝦夷北端の宗谷場所は、冬期にはきびしい寒気にさらされる。連日のように雪が降り、はげしく吹雪く日もあって、役所、運上屋、倉庫などは、庇のあたりまで氷化した雪にうもれる。

宗谷地方は、文化四年（一八〇七）、津軽藩の警備担当地になったが、越冬する藩士たちは寒気と野菜不足で水腫病におかされ、おびただしい数の死者が出た。そのため、三年後には降雪とともに南方にある増毛に引揚げることが許され、さらに文化十二年（一八一五）には宗谷の警備は廃された。それからは箱館奉行所の役人が出張していたが、それも冬には箱館に引揚げ、場所を請負う柏屋藤野家の越年番人とアイヌがいるだけで、番人たちは、小屋に雪がこいをしてとじこもり、アイヌは山中の穴に入って寒気をしのぎ、海岸に人の姿は絶えた。

年の暮れが近づくと、水平線に白い輝きが現われる。それは東の方向に帯状にのび、わずかに起伏している。寄り氷の到来である。

寄り氷は、宗谷から東南方の網走、知床方面にいたる海岸に押し寄せて海面一帯を氷原にするが、宗谷附近の海が氷におおわれるのは数年に一度しかない。海岸線まで氷が押し寄せると、磯に近い海底を荒々しく傷つけて昆布をはじめとした海草類を根こそぎにし、水温の低下で鮑、海鼠、

海栗などを死滅させることもある。

白い輝きは徐々に近づいてくるが、夜の間に風に押しもどされて翌朝には水平線から消えていることも多い。

やがて天候がくずれ、北西風が吹きつのって宗谷一帯が吹雪につつまれると、その風で寄り氷はふたたび沖合から海岸線にむかって移動し、宗谷東方の海面に巨大な氷の群が互にきしみ音をあげながら近づく。それでも、寄り氷は沖に後退することをくり返しながら、年が明けたころには海岸線に達し、その先端は磯にまでのしあがる。

宗谷前面の海は、おびただしい氷の塊がひろがっているだけで、それらは岬をかわして西の方向へ流れてゆく。

寄り氷とともにトドが、それに乗ってやってくる。雌よりも雄の方が大きく、体長一丈三尺(約三・六メートル)、重さ四百貫(一五〇〇キロ)ほどのものもいる。

氷上から続々と海におりたトドの群は、宗谷岬沖で異様な動きをしめす。雌の群は毎年寄り氷で氷結する東南の方向へ泳いでゆき、雄たちは西へむかう。雄は、いくつもの集団になって氷塊のうかぶ海水をあおるようにして日本海を進む。百頭をこえる群も多く、さながら茶褐色の浮島の群のようにみえる。

降雪と霧でけむる前方の海上には、円錐状の山がそびえる利尻の島がある。富士山によく似た山容で、山そのものが島と言ってよく、海岸線まで山裾がのびている。トドの群は島に近づき、巨体をゆすりながら競い合うように岩礁に這いのぼる。北に位置する礼文の島にあがる群もあり、利尻の島近くをかすめて南下し、焼尻、天売の島にむかうものもある。海豹の回游もみられた。

利尻は、周囲十五里(六〇キロ)のほぼ円形の火山島で、中央に利尻岳(一七一八・七メートル)が

そびえ雪におおわれている。山には神霊があると言われ、恐れて登る者はいない。

宝永三年（一七〇六）、能登国生れの豪商村山伝兵衛が松前藩から宗谷場所の漁場請負人に命じられ、宗谷の属島である利尻島もその支配下においた。島にはアイヌしか住んでいなかったが、支配人、番人が常駐し、アイヌの採る魚介類を宗谷に送るようになった。その後、安永三年（一七七四）、飛騨国出身の飛騨屋久兵衛が請負人になった。

鳥獣、魚、野草を食物としていた島のアイヌたちの生活形態は、和人の進出によって根底からくずされ、生きるために従属しなければならず、請負人の利潤追求のため労働を強いられるようになった。さらにかれらに致命的な打撃をあたえたのは、天然痘の流行であった。寛政十二年（一八〇〇）二月、長万部のアイヌが東蝦夷地の有珠に行って感染し、その地一帯に蔓延したのが最初であった。その後、西蝦夷地にも流行がみられるようになり、享和三年（一八〇三）には利尻島と近くの礼文島で九十名が死亡した。さらに二年後には宗谷、天塩地方で五百九人、利尻島でも二十余名が死に、その結果、文政五年（一八二二）の調べでは、利尻島のアイヌは、戸数二十八、男五十七、女五十九の計百十六名と激減していることがあきらかになった。

文化四年（一八〇七）五月、島にとって戦慄すべき出来事が起った。

その事件は、文化元年（一八〇四）九月、ロシア遣日特派大使ニコライ・レザノフを乗せたナデシュダ号が長崎へ入港したことに端を発していた。レザノフは、十二年前にロシア使節ラクスマンが蝦夷の根室で幕府から通商許可をほのめかす約束を得ていたので、それを実行するよう求めるため来航したのである。

レザノフの要求はただちに江戸につたえられたが、幕府からの回答はなく、翌年春になって通商不許可とただちに退去せよという通告をうけた。半年間も半ば拘禁状態におかれ、さらに約束の実行をこばんだ幕府にレザノフは激怒し、強い報復の念をいだいた。

カムチャツカのペトロパヴロフスクにもどったレザノフは、日本を威嚇することによって通商の道を強引にひらくべきだと考え、海軍大尉フォストフ指揮のユノナ号を樺太に派遣した。同艦は樺太南部の大泊を襲い、翌日、久春古丹におもむき、倉庫に貯蔵されていた多量の物品をうばい、運上屋、倉庫、弁天社に火を放った。さらに越冬するためとどまっていた番人富五郎、源七、福松、酉蔵の四人を捕え、連れ去った。文化三年（一八〇六）九月のことであった。すでに冬期を目前に蝦夷北端の宗谷と樺太間の航行は杜絶されていたので、松前藩がその事件を知ったのは翌年四月六日であった。

箱館奉行所は厳重警戒を命じたが、その年の四月二十三日、フォストフ大尉、ダヴィドフ少尉のそれぞれ指揮するユノナ、アホシ両艦が、千島の択捉島内保を攻撃した。ロシア艦の乗組員は、上陸して米、塩、器物をうばって番屋、倉庫を焼きはらい、番人五郎治、左兵衛、稼方長内、六蔵、三助を捕えた。

攻撃は執拗をきわめ、両艦は北上して択捉島の会所のおかれた沙那を襲い、警備にあたっていた南部、津軽藩兵を敗走させて南部藩砲術師大村治五平を捕えた。箱館奉行所から派遣されていた調役下役元締戸田又太夫は、退却途中、責任を負って自刃した。

両艦は反転して蝦夷知床半島沖を西進し、五月二十一日に樺太の大泊、ついで久春古丹、ルウタカで番屋、倉庫を焼きはらった。

利尻島沖に両艦が現われたのは、五月二十九日夕七ツ半（午後五時）ころであった。

島の北岸近くに、宗谷へ物品を送るため松前から北上していた豪商伊達林右衛門の手船宜幸丸（千六百石積み）が、はげしい風雨をさけて碇泊していた。船頭は、異国船が近づくのを眼にして驚き、急いで碇をぬき帆もあげかけた。が、異国船からおろされた大型ボート四艘が鉄砲を打ちかけながら進んできたので、伝馬船をおろして水主たちと乗りうつり、霧にまぎれて東へ漕ぎ進

み、天塩にのがれた。

島にいた番人とアイヌたちは、突然の銃声に驚き、二隻の大きな異国船の姿に恐れおののいた。かれらは、四艘のボートが宜幸丸に横づけになって積荷を積んで本船に去り、ふたたび引き返すことをくり返しているのを見た。そのうちに夜の闇がひろがり、突然、宜幸丸に火の手があがった。半ばあげられた帆にも炎がうつり、赤々と闇の海を染めた。

番人やアイヌたちは、海岸線をはなれて山中に逃げ、翌朝、霧の流れる海上を見わたした。異国船は夜の間に去り、宜幸丸は焼けて沈没したのか姿を消していた。番人は舟を出して、宗谷へこの出来事をつたえた。

ロシア艦二隻がふたたび利尻島沖に現われたのは、六月四日であった。

運上屋、倉庫などのおかれた本泊（ほんどまり）の港に、船体を赤く塗った幕府の官船万春丸（四百五十石積み）が碇泊していた。船には、宗谷、樺太方面に送る四百五十匁（もんめ）ハラカン筒（砲）、三匁五分筒十挺、十匁筒一挺、火薬三十貫目と豊臣秀吉が朝鮮出兵の折に分捕った大筒が載せられていた。船は箱館を出帆、宗谷にむかって航行途中、本泊に寄港、出帆準備を進めていた。

万春丸を発見したロシア艦は、急速に接近して大筒を打ちかけた。砲声は驚くほど大きく、海上一帯にとどろき、利尻岳にいんいんとこだました。万春丸には箱館奉行所大筒役森重左仲と組同心らが乗っていたが、はげしい恐怖にかられ、伝馬船に乗って岸へのがれた。ロシア艦乗組員は、万春丸の大筒、米、酒、地図などをうばい、近くに碇泊していた松前の商船「誠龍丸」の積荷も掠奪（りゃくだつ）し、両船を焼いた。さらに一隊の乗組員は本泊に上陸、運上屋、番人小屋、倉庫に火を放って日没とともに艦に引揚げた。番人やアイヌたちは、森重や同心たちと本泊から山中に逃げた。

翌日、ロシア艦乗組員がふたたび上陸、残された家屋と小舟を焼きはらった。これによって本

泊にあった運上屋、倉庫五棟、番人小屋がすべて焼失、アイヌの家十戸のうち六戸も灰に化した。

その日の夕刻、誠龍丸から押収した伝馬船が艦の舷側をはなれて岸にむかった。艦には、前年の九月に久春古丹で捕えられた富五郎ら四人、この年の四月に内保、沙那でそれぞれ艦に連行された番人五郎治、左兵衛ら五名と大村治五平がいたが、フォストフ大尉は幕府にロシア語の手紙を渡すため、五郎治、左兵衛をのぞく八名を釈放したのである。伝馬船は、本泊の海岸についた。

翌朝、二隻のロシア艦は、大筒の砲弾を数発放ち、帆をあげて舳先を北にさだめ、動き出した。おびただしい海鳥が啼声をあげてその後を追い、帆影は水平線下に没した。

富五郎らは伝馬船を島ぞいに進め、北上して宗谷にたどりついた。その地には、ロシア艦来襲の報に接して箱館奉行所から急派されていた調役並深山宇太夫が、津軽藩兵八十名とともに詰めていた。

フォストフ大尉の手紙には、日本語にわずかながら通じている艦の乗組員が書いた日本文も添えられていたので、概略の意味をつかむことができた。それによると、ロシアの通商要求を言を左右にして拒絶した幕府の態度は、ロシアを属国扱いした非礼きわまりないもので、樺太、択捉島を襲ったのは、ロシアの武威をしめすためである、と記されていた。幕府が通商要求をいれるなら、ロシア側は焼きはらった建物を建てなおし、五郎治、左兵衛も送還する。もしも不許可の態度を変えぬ折には、明年早春に大軍を発して樺太、千島はもとより日本全土を攻撃する、と書かれていた。

幕府は、ロシア艦の来攻にそなえて奥羽諸藩に出兵を命じ、宗谷方面は会津藩兵の警備地域に指定された。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

翌五年正月、千六百人の会津藩士は若松城を出立、松前その他に分駐し、四月十七日、梶原平馬が軍船六隻に五百八十七人を乗せて宗谷に到着した。さらに梶原は、そのうちの二百四十一人をひきいて利尻島に上陸、配備についた。

会津藩兵は、仮住居を作り越冬にそなえた。かれらは、冬の寒気と野菜不足による水腫病の恐しさを耳にしていた。前年に北辺に配備された諸藩の者のうけた被害はいちじるしく、国後、択捉島に越冬した南部藩士六十八名、宗谷の津軽藩士七十余名が死亡、ことに斜里に越冬した津軽藩士百名中生き残ったのはわずか十三名であった。

冬がやってきて海は荒れ、航行は杜絶し、島は孤立した。恐れていたことが現実になり、藩士はつぎつぎに水腫病で倒れ、多くの者が死亡した。

その年、ロシア艦が予告通り来襲することが予想され、厳重警戒にあたったが、帆影をみることはなくすぎた。

幕府は、越冬藩士の死者が多いことを重大視し、翌七年三月、寒気のきびしい樺太、宗谷詰めの藩士を、冬の期間中、増毛まで引揚げて越年することを許した。その処置にともない、五月には利尻島の警備が廃され、藩士は一人残らず島を去った。

島は静穏をとりもどし、新たに宗谷場所請負人になった松前屈指の豪商藤野喜兵衛が本泊に運上屋を設け、支配人、番人を常駐させ、鰊場三カ所をひらいた。島に住むアイヌは少くなっていたため、宗谷方面のアイヌを送りこんで労働を課した。

その後、日露関係は好転して外圧による脅威は薄らぎ、四十年が経過した。

岩礁で休息をとっているトドの群は、時折り一斉に動き出すと海におどりこむ。

利尻島周辺の海域は、魚介類が豊富であることで知られ、想像を絶した旺盛な食欲をもつトド

の群は、それらを手当り次第にあさる。群泳する鱈、烏賊をはじめ水だこ、えび、蟹など種類をえらばない。氷塊のうかぶ海面から首をのばしたトドが、力を誇示するように吠え声をあげることもあった。島は雪と氷におおわれ、吹雪につつまれる日も多かった。海は荒れて霧が立ちこめ、利尻岳も裾の部分がわずかにみえるだけであった。

二月に入ると気温がわずかにゆるんだ。天候は変りやすく、青空がのぞくかとみると厚い雲がひろがり、雪が舞う。本泊に人の姿はなく、番人小屋や山肌にうがたれているアイヌの住む穴の煙出しから、かすかに煙がただよい出ているだけであった。

弘化五年（一八四八）二月二十八日、元号が嘉永に改まった。

北上する対馬海流に島が洗われているため、春の訪れは早い。海面にうかんでいた氷塊も少くなり、やがて消えた。

そのころ、宗谷東南方の網走、知床方面の海をおおっていた氷原に変化が起きていた。所々に海面がのぞくようになり、寄り氷が岸をはなれはじめた。風に押されて沖にむかうが、ふたたび岸に寄せてくる。そのようなことをくり返しながら、三月中旬には水平線から姿を消した。

利尻島の岩礁に群棲していたトドの群にも、きわ立った動きがみられた。それらは、島からつぎつぎにはなれ、集団を組んで去りはじめた。トドは、寄り氷を追うように北上して宗谷岬沖をすぎ、知床半島方面からやってきた雌の大群と合流する。行先は、カムチャツカ沿岸やアリューシャン列島の島々で、雄一頭が十頭余の雌とハーレムを組んで岩の上などで交尾し、六月ごろ、雌はそれぞれ一頭の仔をうむ。

朝夕の寒気は残っていたが降雪は絶え、島は、海霧につつまれることが多くなった。

住居の屋根から布のように垂れていたつららから水滴がさかんにしたたり、屋根の雪が音を立てて落ちる。雪どけがはじまり、山の方向から雪崩の音がきこえ、雪煙の舞いあがるのを眼にす

ることもあった。

穴居生活をしていたアイヌたちも家にもどり、女や子供たちは岩礁で魚介類をあさる。風波は弱まり、晴れた日には、礼文の島はもとより宗谷方面も望むことができた。

海がおだやかな日の夕刻、東北の海面に帆がつらなって近づいてくるのが見えた。弁才船一艘をふくむ図合船の一団であった。船は、本泊の港に入った。図合船には、やがて群来する鰊の水揚げその他の労働に従事するため宗谷地方から送りこまれてきたアイヌの男たちが乗り、弁才船には玄米をはじめとした食糧、日用品が載せられていた。

翌早朝から老練なアイヌの漁師が、高みにあがって海上の見張りにつき、浜では、干場や宗谷からきたアイヌたちの住む仮屋の修復がすすめられた。

数日後、鰊が寄せてきたという報せが、見張りのアイヌから運上屋につたえられた。海面はざわめき、雄の放つ白子が昆布、若布をはじめとした海草に附着し、海は白濁した。

図合船に六人、アイヌの舟に三人がそれぞれ乗り組み、岸をつぎつぎにはなれ、海中に網をおろした。たちまちいずれの網にも鰊がなだれこんでふくれあがり、アイヌたちは力をそろえてそれをあげる。船上には鰊があふれるように盛りあがり、落ちこぼれた鰊の入っている網を船尾にくくりつけ、掛声をかけて櫂をあやつり、舟を岸につけ、鰊をあげるとふたたび網立て場へもどってゆく。

浜では鰊を大きなモッコに入れ、男が二人でかついで女たちの待つ場所へ運ぶ。女たちは、鰊を刀でひらき、数の子、白子をかき出し、笹目と呼ばれる鰓を切り取る。ひらいた鰊を男たちが二十尾ずつ紐に通して連とし、十連を一束にして天秤棒の前後につるし、干場に運び、横木にかけてゆく。

女たちは数の子を大樽に入れ、白子、笹目を蓆の上にひろげて干した。数の子、白子は食用と

なり、笹目は肥料として送り出される。鰊は干場で一昼夜風にさらした後、納屋に運びこんで三十余日陰干しされる。

アイヌたちには、鰊六束、数の子、白子三樽、笹目六十樽でそれぞれ八升の米が報酬としてあたえられる定めになっていた。海上には図合船、アイヌの船が網立て場と岸の間を往き来し、浜では作業がくりひろげられ、運上屋の支配人、番人も浜につめていた。

海が荒れると舟は出せず、女たちは、ふきのとうを採取する。雪がとけて黒い地表が現われ、陽光をあびて水蒸気が一面にゆらいでいた。

その年の鰊漁は前年と同じく豊漁で、納屋以外に番人小屋までも鰊が干され、魚臭がむせ返るほどただよっていた。

ようやく鰊の魚影が去ったころ、シャクをはじめとした野草が地表をおおうようになり、アイヌの女と子供たちはそれらを採取し、男たちは、干し上った鰊の俵づめに働いていた。

作業が終って、弁才船に鰊その他が積みこまれて宗谷に去ると、海鼠漁がはじめられた。海鼠は、腸をぬいて煮て乾燥し、煎海鼠にする。清国ではこれを食物、薬品用に珍重していたので、長崎から重要な輸出品の俵物として唐船で送り出されていた。幕府は増産にはげむよう布達を発し、箱館には長崎から俵物会所の役人が出張して、問屋に買入れをおこなわせ、長崎へ送っていた。

舟が一斉に出漁し、海鼠の多く棲息する海に網をつぎつぎにおろした。潮の良い折には一網で二、三十は入り、日に一人で二千ほどあげる舟もあった。海鼠を満載した舟は運上屋のある本泊に来て、それらを浜にあげる。運上屋の者が数を改め、五百を一単位にアイヌの腕に矢立で印をつける。アイヌは会所へ行って印をみせ、奨励の酒をうけるのが習わしであった。

アイヌたちは海鼠をそれぞれ家へ持帰り、女たちが腸をぬいて大鍋で煮る。それを長さ一尺の串に十ずつ通し、十本を一連にして晴天の日は戸外で、それ以外の日は囲炉裡の上へつるして干

し、煎海鼠にする。煎海鼠百につき米一升二合五勺が報酬としてあたえられた。

好天の日がつづき、海鼠の漁獲は増し、浜では大鍋からさかんに湯気があがっていた。山頂附近に雪の残る利尻岳が澄んだ空を背景にくっきりと見え、海面には海猫が群れていた。そのころから、沖合に鯨の吹く潮をしばしば眼にするようになり、海鼠漁の舟の近くをすぎてゆく群もいた。

アイヌたちは鯨をとるすべを知らず、むなしく見送った。かれらがそれを得るのは寄せ鯨で、その月にも西海岸に一頭が打ちあげられているのが見出された。寄り氷でいためつけられたり鯱に襲われて浅瀬で動けなくなっている鯨であった。かれらは、それを解体して家の近くに運び、脂肪を煮て油をとり、肉を干して石焼鯨として貯蔵した。

文化十年（一八一三）、日本側で捕えたロシアの艦長ゴロヴニンの釈放によって日露関係は平静化したが、日本の沿岸ことに蝦夷地に出没する異国船は、年を追うごとに激増していた。文政七年（一八二四）、天文方兼御書物奉行高橋作左衛門景保は、近年わが国沿岸に接近する異国船のほとんどすべては鯨漁の船である、と上申したが、それは事実であった。

欧米では、もっぱら大西洋で鯨漁をおこない、鯨油をローソクをはじめとした燈油、機械の潤滑油等として売る。また鯨鬚なども装飾品その他に利用され需要が大きかったので、捕鯨業者は莫大な利潤をあげていた。捕鯨会社は、さかんに船を漁場にくり出させていたが、一七九一年（寛政三年）には、アメリカ船が初めて大西洋から太平洋に入り、やがて赤道附近にまで達した。

一八二〇年（文政三年）、清国からハワイへむかうアメリカ商船が、日本近海におびただしい数の鯨が群泳しているのを目撃し、捕鯨基地になっていたハワイにそれを伝えた。新しい漁場を求めていたアメリカ捕鯨船は、争って日本近海に出漁、イギリス船もそれを追っていちじるしい漁獲高をあげた。アメリカ船は日本近海に年間百余隻も出漁し、イギリス船も十隻前後を数えた。

捕鯨船は、鯨油をとるため脂肪を船上で煮るので薪(まき)を必要とし、日本の海岸にひそかに上陸して樹木を伐り倒し、さらに飲料水、食糧を求めて着岸するようになった。鎖国政策をかたく守る幕府は、それらの捕鯨船を通商を強要するため来航した船と錯覚して、理由のいかんを問わず撃ち払うことを命じた。その後、薪、水、食糧をあたえて穏便に退去させるよう指示したが、それでも紛争はいたる所で起り、死者を出したこともあった。

大西洋での漁獲量が減少したため、欧州の捕鯨船も日本近海に進出するようになり、漁獲競争は激化した。漁場は蝦夷、千島方面に徐々にうつり、それにともなって捕鯨船もその方面に集中するようになった。

弘化年間に入ると、この傾向は、捕鯨船のひんぱんな陸岸接近となって現われた。元年には室蘭にあいついで三隻、厚岸(あつけし)に一隻、二年には択捉島に一隻、三年に択捉島に二隻、福山に一隻、四年には知内、福島、津軽海峡に各一隻が出没し、これらはアメリカ船が多かったが、ドイツ、フランス船もまじっていた。

五月下旬、ようやく海鼠漁も終り、煎海鼠の搬出作業が連日つづけられた。鯨の群の回游は増し、海上でしばしば潮の吹きあげられるのが望見された。黒い背をみせながら、島を迂回するように西の方向へ去ってゆく群が多かった。

二

六月二日早朝、島の北東部にある野塚(のつか)のアイヌたちは、海上に異様な小舟が浮いているのを眼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.